

# 中國語發音指導の一方法

——VT法を應用して——

鈴木 義 昭

はじめに

中國語は所謂トーンアクセントに屬する言語で、音の高低を伴っていることはよく知られたことである。それを強調するため、初級教科書の中には必ずと言ってよいほど「四聲」を表にしたものが載っている<sup>(1)</sup>。あるいは、數字によって、55とか35と書かれることもある。ただ、こうしたものを頭の中で理解しただけでは、發音することはできない。オシログラフ等を用いて視覺的に覺えるだけでも、やはり不十分である。各教授者にはそれぞれの方法があるであろうが、筆者は、これまで四つの聲調を實際に體を使って覺えるようにすることを實踐してきた<sup>(2)</sup>。この時、用いた理論がVT法である。VT法とは、「Verbo-Tornal System」の略語で、クロード・ロベルジュ氏の提唱になるものであって、外國語教育の中のリズム・イントネーションの重要性を強調した方法である<sup>(3)</sup>。また、底流にあるのは、母國語を離れ、外國語を習得する前驅段階として、第二言語を獲得するための方法の模索である<sup>(4)</sup>。

本稿では、筆者による試み——一つ一つの聲調だけでなく、主として二音節の發音にそれを應用したもの——を報告したい。

實踐例

## (1)一音節（四聲）

郭錦桴によれば、第四聲が最も短く、第二聲がそれに次ぎ、第三聲が最も長く、第一聲がそれに次ぐと言う<sup>(5)</sup>。我々の經驗則によっても、各聲調の長さが異なっていることは知られている。したがって、ここで注意しておきたいことは、以下の諸點である。

第一聲においては、基準点としてのこの音の高さを覚えさせることに留意するとともに、この音の長さを他の音の長さの標準とするように指導することである。第二聲の場合、中國の現地音は時として低く發音されるので、將來ネイティブの自然な音聲に對應できるよう、第三聲との對比を身につけさせることが必要である。前述のとおり、第二聲は、第三聲より短いのであるから、ジェスチュアにおいて、かなりのスピードを要求しておかねばならない。第三聲の場合、かの「四聲表」や聲調の數字を見ている學生は、圖や數字にあるような發音をしようとするあまり、第四聲と輕聲の複合したような發音をするケースがあって、その矯正にかなりの時間がかかることがある。圖や數字を見せて指導するよりは、むしろ可能限度一杯の低い音を長めに緩やかに發音することによって、近い將來學習することになる「半上聲」を視野に入れた練習が望ましいであろう。第四聲は、第二聲とともに長さが短いので、ジェスチュアのスピードも早くするように指導したい。

なお、この時点では、「不送氣」、「送氣」の區別に伴う長短については、敢えて無視することにする<sup>6)</sup>。

i) 第一聲

まず姿勢を楽にして、右手を口のところに持ってゆき、手のひらを水平にして、それを右に動かしながら、「アー」(便宜的に [a] を用いる) と發音する。



ii) 第二聲

右手を心臓のところに持ってゆき、その位置から手を斜め(口の延長上)まで伸ばしながら、「アー」と發音する。



iii) 第三聲

手のひらをへそ少し下の所に置き、その手を腹に添わせながら、「アー」と發音する。



iv) 第四聲

手のひらを口のところに持ってゆき、その位置から斜め(へその延長上)まで一気に下げながら、「アー」と發音する。



v) 輕聲

(②の二音節の項で説明する)

(2)二音節

二音節語の前字後字の長さは必ずしも一定しないが、後ろに輕聲が付く時、「二番目は一番目より短く、一般に前の字の半分の長さすなわち約1/3である」と言われる<sup>7)</sup>。その他の組合せについては大まかに言って、①1/2+1/2、②2/3+1/3、③1/3+2/3に類型化できよう<sup>8)</sup>。

①は【VT法Ⅱの1 a・b】のように、前後の文字の發音時間が等しくなるようにする。②は前の文字が1/3、後ろが2/3の比率にする【VT法Ⅱの2・a】～【-4・a】。③は②の反對である（【VT法2・b】～【VT法Ⅱの2・b】～【-4・b】）。なお、a・bは逆方向に移動する。

以下、實際の單語（私の場合、やむを得ずHSK試験の甲級の單語を中心としている<sup>9)</sup>）を擧げて、個々のケースについて、練習させる。ただし、個々の漢字・意味を覚えさせる必要はない。單語の持つリズムを體感する

ことが主眼だからである。こうした方法では、ラジオ體操のように、關節を極限まで伸ばす必要はない。とにかく、リズムすなわち時間の配分ができればよいのである。以下、各項目別にした單語を上げて参考に供したい。

なお、この練習に入る前に、漢字の成り立ちを利用した發音法、《子音と母音の足し算<sup>10)</sup>》を教えて、各音の音價を固定させておくと効果が大きい。例えば、白[bái]を發音させる時、[bo]+[ai]と發音し、最後に聲調をつける方法である。子音の響きのあるうちに母音を發音させるわけである。

《第一聲》

第一聲の場合、後ろに第三聲が來る時、單語によっては、それが第二聲に近い調子になることがある<sup>11)</sup>が、この時期においては、敢えて無視することにする。ここではVT法Ⅱの1、Ⅱ4・a等が適當であろう。練習に入る前に、前項の2で學んだVT法Ⅰで、音の高さを安定させておくとよいであろう。



【VT法Ⅱの1 a・b】



【VT法Ⅱの2 a・b】



【VT法Ⅱの3 a・b】



【VT法Ⅱの4 a・b】

i) 第一聲 + 第一聲 (【VT 法Ⅱの1】等)

[canjia], [canguan], [chufa], [fashao], [feiji], [ganbei], [guanxin],  
[jintian], [kafei], [shengyin], [tingshuo], [xibian], [xingqi],  
[yisheng], [yinggai]

ii) 第一聲 + 第二聲 (【VT 法Ⅱの1】等)

[anpai], [feichang], [gangcai], [gongren], [gongyuan], [huanying],  
[jianchi], [jinnian], [jingchang], [jinshen], [kaixue], [piping],  
[shengci], [shenghuo], [suiran], [xinwen], [yaoqiu], [Yingwen],  
[Zhongwen]

iii) 第一聲 + 第三聲 (【VT 法Ⅱの1】等)

[caochang], [gangbi], [gongli], [heiban], [kaishi], [paishou],  
[qianbi], [shenti], [tingxic], [xinku], [weixian], [Yingyu],  
[zhongwu]

iv) 第一聲 + 第四聲 (【VT 法Ⅱの1】等)

[anjing], [bangzhu], [chezhan], [fangyi], [ganjing], [gaoxing],  
[gongzuo], [jingguo], [shengri], [tianqi], [tingjian], [xiwang],  
[xuyao], [yinyue], [zhuanye]

v) 第一聲 + 輕聲 (【VT 法Ⅱの4・a】等)

[chulai], [chuqu], [chuanghu], [dongxi], [duome], [duoshao],  
[furen], [gege], [gongfu], [guniang], [guanxi], [mama], [qingchu],  
[shufu], [tamen], [wuzi], [xiansheng], [xingxing], [yifu], [zhidao],  
[zhuozi]

《第二聲》

第二聲の場合、VT 法Ⅱの4aなどが適當であろう。なお、第三聲と第三聲が連続した場合、前の第三聲が第二聲に変わる。そのため、第二聲と第三聲の形になるので、便宜的にこの項に入れる。また、第三聲と第三聲とが連続する場合、後半の第三聲が輕聲になることがある。これも便宜的に第二聲と輕聲の項に入れることにする。

i) 第二聲 + 第一聲 (【VT 法Ⅱの1】等)

[Changjiang], [chenggong], [fangjian], [guojia], [huijia], [jiehun],

[likai], [liaotian], [maoyi], [mingtian], [nianqing], [pangbian],  
[shijian]

ii) 第二聲+第二聲（【VT法Ⅱの1】等）

[congqian], [huida], [liuxue], [mingnian], [nianji], [nongmin],  
[renmin], [shitang], [tongxue], [wenxue], [xuexi], [yinhang],  
[youju], [zhaoji], [zuqiu]

iii) 第二聲+第三聲（【VT法Ⅱの3・b】等）

[cidian], [maobi], [meiyong], [menkou], [niunai], [pijiu], [pingguo],  
[youyong]

【第三聲+第三聲】（【VT法Ⅱの3・b】等）

[Fayu], [jiantao], [jiegou], [kouyu], [liaojie], [mianqiang],  
[shoubiao], [shuiguo], [xiaojie], [youhao], [yufa], [yexu], [zhanlan]

iv) 第二聲+第四聲（【VT法Ⅱの4・a】等）

[bucuo], [budan], [buyao], [buyong], [chidao], [cidai], [fuwu],  
[hanjia], [heshi], [huodong], [jueding], [laojia], [lianxi],  
[liangkuai], [liunian], [nianji], [qingkuang], [ranhou], [shihou],  
[tongzhi], [xuexiao], [xueyuan], [yanse], [yiding], [yigong],  
[yihuir], [yikuir], [yixia], [yiyang], [yukuai], [yuanliang]

v) 第二聲+輕聲（【VT法Ⅱの4・a】等）

[biede], [bieren], [erzi], [huilai], [huiqu], [kesou], [mafan],  
[mingzi], [pengyou], [pianyi], [qianbian], [rongyi], [xingli],  
[xuesheng]

vi) 第三聲（第二聲）+第三聲（輕聲）（【VT法Ⅱの4・a】等）

[keyi], [nali], [suoyi]

《第三聲》

第三聲の場合、VT法の2の方法が適當であろう。ここでは、第三聲（第二聲となる）+第三聲、および第三聲（第二聲に變わる）+第三聲（輕聲に變わる）は省いておく。

i) 第三聲+第一聲（【VT法Ⅱの2a】等）

[dianxin], [dianzhong], [guangbo], [haochi], [haohe], [huoche],

[jingzhang], [kache], [laoshi], [shoudu], [yijing]

ii) 第三聲+第二聲 (【VT法Ⅰの1】等)

[haowan], [jiancha], [jiejue], [keneng], [lüxing], [manzu], [nüer],  
[qichuang], [xiaohai], [xiaoshi], [yiqian], [yiwei], [youming],  
[zaochen]

iii) 第三聲+第四聲 (【VT法Ⅰの2・a】等)

[bisai], [dasuan], [gandao], [ganxie], [haoxiang], [kaoshi], [liwu],  
[mashang], [maimai], [manyi], [paobu], [qingwen], [qingjia],  
[shiyong], [tiyu], [wanfan], [wanhui], [wufan], [youyi], [zaofan],  
[zenyang], [zhangwo], [zhuyi]

iv) 第三聲+輕聲 (【VT法Ⅰの4・a】等)

[benzi], [bijiao], [erduo], [jiaozi], [jiejie], [nimen], [nuanhuo],  
[muqin], [women], [xihuan], [yanjing], [yizi], [zenme], [zhuyi]

《第四聲》

第四聲の場合、後ろに来る語が第一聲の時、この語はやや低く發音されることがある。また、後ろに来る語が第四聲の時、この語がやや低く發音されるとも言うが、敢えてこれらを見做す<sup>12)</sup>。VT法の1を利用するのがよいであろう。

i) 第四聲+第一聲 (【VT法Ⅰの3・b】等)

[bantian], [bixu], [changge], [dajia], [dianche], [huxiang],  
[jiankang], [mianbao], [qiche], [renzhen], [yibian], [yixie],  
[zhexie]

ii) 第四聲+第二聲 (【VT法Ⅰの3・b】等)

[bingren], [daxue], [fuxi], [jinxing], [lianxi], [reqing], [renwei],  
[shangxue], [shuxue], [waiguo], [waiwen], [wentu], [xingfu],  
[yizhi], [yuxi]

iii) 第四聲+第三聲 (【VT法Ⅰの3・b】等)

[banfa], [gezong], [huozhe], [lishi], [qishui], [Riyu], [shangwu],  
[waiyu], [wenhao], [woshou], [xiawu], [yiqi]

iv) 第四聲+第四聲（【VT法Ⅱの1 a・b】等）

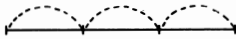
[bianhua], [cuowu], [dagai], [danshi], [dianhua], [dianshi],  
 [duanlian], [fangjia], [ganbu], [guixing], [guoqu], [Hanzi], [jihua],  
 [jianmian], [jiaoshi], [jieshao], [nayang], [sanbu], [shangke],  
 [shehui], [shijie], [shuijiao], [sushe], [xiake], [xianzai],  
 [yudao], [yuanyi], [yundong], [zaijian], [zhaoxiang], [zhongyao],  
 [zhuyi], [zuoye]

v) 第四聲+輕聲（【VT法Ⅱの2 a】等）

[airen], [baba], [daifu], [difang], [fuqin], [gaosu], [jinlai],  
 [jinqiu], [kanjian], [keqi], [maozi], [meimei], [nage], [nali],  
 [name], [renshi], [shanglai], [shiqing], [wazi], [xiexie], [yaoshi],  
 [yeli], [yisi], [yueliang]

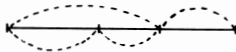
(3) 三音節

中國語は二他節を基本にした言語であるため、單語レベルとしては、三音節單語は二音節單語と比べると、その数はあまり多くない。むしろその語構成から見ると、一他節の單語に二音節の單語がつく場合、二音節の單語に一音節の單語がついて構成されることが少なくない。初級の場合、例えば、「辦公室」、「圖書館」のような單語は、「辦公」と「室」、「圖書」と「館」とが組み合わせられたものである。「動物園」、「飛機場」、「火車站」、「留學生」、「旅行團」、「外國人」、「文學者」、「圓珠筆」、「自行車」等、いずれもこうした語構成からできている。したがって、この種の三音節單語を發音する時は、それぞれを等しく、



のように發音しない。

のように、



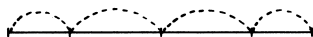
全體が2/3、1/3に別れ、前の二文字がさらに2/3、1/3に別れている。すなわち、最後の語が一番長く、次いで最初の語、真ん中の語が一番短いということになる<sup>49</sup>。それは、一語の意識があるからであろう。一字ずつ同じ間隔で發音されたとすれば、一字一字が獨立したものということになり、意味の理解に

齟齬が生じることになる。一語の中で、短く發音された語は、聲調性を希薄にする<sup>14)</sup>。そうした現象の顯著なものが「對不起」、「了不得」、「了不起」、「怎麼樣」等の間に輕聲の挟まれたものであろう。この場合、「不」、「麼」は完全に聲調を失っているわけである。動詞／形容詞＋賓謂等の構造を取るものも、基本的には同じと言える。その練習としては、VT法Ⅱの2~4を應用するのがよいであろう。ただし、動作を小さくする等して、腕のスピードを落とさないように注意しなければならない。

なお、ここでは個々の單語による高低は敢えて無視する<sup>15)</sup>。

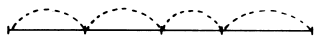
#### (4) 四音節

三音節の單語よりもさらに数が少なくなるとともに、ジェスチャーによる練習は難しくなって來るので、教授者は注意しなければならない。語構成から言えば、四字熟語となることも多い。むろん、「百貨商店」、「超級商店」、「長途電話」、「初次見面」、「家庭婦女」、「時裝表演」等は、この場合、いずれも二字の熟語の集合體である。この場合、二語＋二語の語構成を取る場合の練習方法は、VT法の二語の動作を二度繰り返せさせればよい。この時、中間に少しポーズが入ることもあるが、ここでは指適しない。

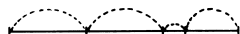


等のように、讀むのがよいであろう。もし、それを均等に讀めば、一語一語の獨立性が高まるし、極端な場合、意味が不明になるからである。そうしたことを避けるため、上のような讀み方が行われるのであろう。

なお、四字句の成語や政治的スローガンを叫ぶ場合等よく見られるものとして、「下定決心」、「不怕犧牲」等のように、前半の二字熟語を比較的長く讀み、後半の二字熟語の前の部分を、やや短くして、



等のように讀む讀み方や、「百忙之中」、「危急之際」等のように、前半の二字熟語を比較的長く讀み、後半の一字目を短めに讀んで、後ろの二字目をやや長目に讀むものもある。この場合、三文字目は「的」や「之」等の助詞である場合が多く、





等のようになる。しかし、入門期においては、こうした語は必ずしも練習する必要ないであろう。やはり、一音節、二音節の語が基本である。

## 結 語

以上、ここ數年來筆者が實踐して、比較的効果が上がったと思われる初級中國語における發音教育の一部を報告させていただいた。この方法で發音教育の全てがカバーできるなどとは無論考えていない。それに、詳しいデータを取っていないのが誠に遺憾である。ただ、少なくとも聲調を學習する段階及び、二音節の單語の發音を學習するといった人工言語から自然言語へ移行する一時期の訓練としては有効であると考え。三音節のもの、四音節のものも参考までに掲載したので、併せてご批教いただければ幸いである。繰り返して言うが、本稿で述べたものは、單語レベルを中心にしながら、自然言語＝文レベルへの移行を念頭に置いたものである<sup>4)</sup>。文レベルの發音練習は初級の中期、後期教育の分野に入るものであろうし、これはまた別な機會に譲りない。

## 注

- (1) 『基礎漢語』（北京語言學院編）、『基礎漢語課本——教師手冊』・1（北京語言學院 外文出版社 1981）を初めとして、日本で出版された中國語教科書では、いずれもこの圖が採用されている。
- (2) 授業時間中に實施した以外、論文としては發表したことはないが、『中國語が面白いほど身につく本』（中經出版社 1991. 10）、『中國語教科書』（DiLA 1996, 10 非賣品）などで採用。
- (3) 『日本語の發音指導——VT 法の理論と實踐』（クロード・ロベルジュ、木村匡康、川口義一編著 凡人社 1990. 2）
- (4) 筆者は、「セカンダラングエジ・ストラテジー」として、母國語と外國語の間に第二の言語を設定して、兩者の交渉を通じて、最終的に當該外國語を習得するという觀點から、この論を進めている。VT 法もその一環である。
- (5) 『漢語聲調語調闡要與探索』（郭錦桴著 北京語言學院出版社 1973. 7）p. 166による。
- (6) 『現代漢語語音概要』（吳宗濟主編 華語教育出版社 1992）p. 37によれば、「不送氣」は短くて弱く、「送氣」は速度が早く、強い」とある。
- (7) (6)の p. 24による。また、(5)p. 228には、「輕聲字の長さは重音字の約50%がた短い」とあり、これによって、ジェスチュアのストロークを三分の一にする。また、(6)p. 176の圖によれば、第四聲を除き、後の聲調は同じ高さを共有し、各

聲調の原調に従って停止する。この意味で比較的一定性をもっていると言える。

- (8) 林燾等著『北京語言實驗錄』(北京大學出版社 1985) p.4 および郭錦桴『漢語聲調闡受與探索』(前出) p.165 等による。

それに對して、後ろに付く語が聲調を失わないのとは自ずから高さが違って来るものと言える。ここでは、その差のことを言う。

- (9) 現在、日本では教育用の中國語初級語彙表の作成が行われておらず、二三の基本語辭典の出版に止まっている。そのため、『漢語水平 詞匯與漢字等級大綱』(國家對外漢語共學領導小組辦公室 漢語開閉考試部編 北京語言學院出版社 1992.6) によることが多い。筆者の『日本語から覺える中國語單語』(創拓社 1995.9) もこれを一つの基準とした。
- (10) 拓牧編『汉语拼音入门』(上海教育出版社 1959) でも行われているが、1980年初頭、筆者が北京に滞在した時、子供たちと見た、テレビの子供向け番組、「學拼音」で用いられていた方法が印象深い。まず子音(必ず母音を付ける)を發音し、その後で母音を發音し、兩方の音を殘響としながら、その文字を發音するという方法である。聲調は、母音の法に付ける。子音と母音とを並べて發音し、一つの音を作るという意味で「足し算」と呼ぶことにした。これはまさに古代の「反切」を實地に音で表現していることになる。
- (11) (5)のp.177による。
- (12) 趙元任『中國話的文法』(丁邦新翻譯, 中文大學出版社) p.17によれば、第四聲+第四聲の場合、53:51が53:51のように變化すると言うが、郭錦桴『漢語聲調語調闡要與探索』は、後ろの第四聲の最低部が前の第四聲と一致する點を指摘するに止める。この段階では、必ずしも拘る必要はないであろう。
- (13) (7)のp.24による。
- (14) (7)のp.46では、語音が短くなればなるほど、強さが強まるが、この短さが輕聲である所以と言う。
- (15) (5)p.160には、同聲調による音の高低の圖が掲載されている。これによれば、[ma]と[mi]では前者が199Hzであるのに對して、後者は230Hzであると言う。こうした差異をこの段階では、敢えて無視するという意味である。
- (16) (4)に同じ。